研究ノート

ヨハネ伝十章「羊飼いの譬え」についての一省察

竹島　俊之

(1) まず本論を進めていく上で必要な関係箇所を引用しておこう。

十章まことに、まことに、あなた方に言う、門を通って羊小屋に入らず、あらゆる所から登ってくる人、その人は泥棒であり、盗賊である。二門を通って入って来る人は羊飼いである。三門番は彼に戸を開けてやり、羊は彼の声を聞く。彼は自分の羊を名で呼び、外に連れ出す。四自分のすべての羊を外に出したとき、彼らの先頭に立って進んで行き、羊は彼について行く。彼の声を知っているからである。五よそ者には決してついて行かず、彼から逃げて行く。よそ者の声を知らないからである。六この譬えを彼らに語った。しかし、彼らは彼が何を言おうとされたのか分からなかった。七ふたたび彼らにいわれた。まことに、まことにあなた方に言う。私は羊の門である。八私より前に来た者たちは皆盗人であり、盗賊である。羊たちは彼の声を聞かなかった。私は門である。私を通って入る人は救われ、出入りし、牧草を見つけるだろう。十一私は良き羊飼いである。良き羊飼いは自分の命を羊のために捧げる。十二雇い人は羊飼いではなく、羊は彼のものではない。彼は狼が来るのを見て、羊を見放して逃げる。そして狼はそれを襲いそして追い散らす。十三彼は雇い人であり、羊を気にかけないからである。十四私は良き羊飼いであり、そして私の羊を知っているし、私の羊は私を知っている。十五父が私を知っているように私も父を知っている。そして私の命を羊に捧げる。十六私にはこの羊小屋からではない他の羊もいる。私はそれも導かねばならない。その羊も私の声を聞くだろうし、そして一つの羊の群れになるだろうし、一人の羊飼いとなるだろう。十七このために父は私を愛するのである。私が命を捧げ、また取りあげるために。十八誰も私から命を取りあげることはできない。私が自分からそれを捨てるのである。私にはそれを捨てる力があり、それをまた取る力がある。この命令は私が父から受けたものなのだ。

(2)「私の声を聞いて一つの群、一人の羊飼いとなる」これがキリスト教にとって重要な概念であることはイエスの死を予言する司祭長の言葉およびそれに続く次の言葉によって明瞭に示されていると思われる。

十一章四九 彼らの一人、その年の司祭長であったカイアパスが彼らに言った。何も分かっていないのだな。五〇 一人の人が国民のために死に、民族全体が滅びない方があなたたちにとって利益になることをよくよく考えていないのだ。五一 このことは彼自らが言ったのではなくて、その年の司祭長だったので、イエスがこの民族のために死のうとしていることを予言したのだった。五二 そしてこの民族のためだけでなく、散らばっている神の子を一つに集めるためだった。

(3) ポリュビオス『世界史』を翻訳していて、聖書のこの箇所をまざまざと思い出す文章を見出したのでそれを紹介しておこう。

十二巻Ⅱアフリカとコルシカ島にかんする

*ティマイオスの間違い

三その土地の肥沃さは誰もが驚くであろう。ニティマイオスはリビアについて無知であるだけでなく、幼稚であり、非論理的で、リビアはすべて砂地で乾燥していて不毛であるというわれわれが受け継いでいる古くからの風説にすっかりとらわれている。三同じことは動物についても言える。その土地の馬、牛、羊、それらに加えて山羊の数量はとてつもないものであって、世界でここ以外にこれほどの土地を見つけることができるかどうか分からないほどである。四リビアの民族の多くは耕作する日々の穀類だけでなく、家畜の肉で家畜と共に生計を立てている。五象、ライオン、ヒョウの力について、またカモシカの美しさ、ダチョウの大きさについて誰か耳にしたことがない人がいるだろうか。ヨーロッパにはそうした動物は一頭もいないがリビアはそれらの動物であふれているのである。六ティマイオスはわざとであるかのようにそれらにはなにも触れず真実とは反対のことを説明している。

七ティマイオスはリビアの事柄にかんして思いつきで書いているように、キュルノスと呼ばれる島（コルシカ島）についても同じように記述している。八すなわち、第二巻でそれについて言及しながらその島には野生の山羊、羊、野生の牛がたくさんいる、さらには鹿、兎、狼その他の動物もいて人々はそれらの狩をして時を過ごし、こうしたことで全人生を送ると言う。九しかしこの島には野生の山羊あるいは牛はいな

いし、野兎も狼も鹿も、およそこうした類の動物はいない、狐や飼い兎や野生の羊以外は。十飼い兎は遠くからは小さな野兎のように見える、しかし手にとって見ると大きさと食べ物で大きな違いがあることにすぐ気づく。それはたいてい地下で過ごしている。

四この島のすべての動物は次のような理由で野生のように見えるのである。牧人はこの島が密林で覆われ、急傾斜で、でこぼこであるために家畜について牧草地に行くことができない。そこで集めようと思ったときには、適当な場所に立って、ラッパで動物を呼び集める。動物はすべて間違わずに自分のラッパのほうへ走り集ってくる。三誰かがこの島に上陸して山羊あるいは牛が一人で草を食んでいるのを見て、捕まえようとすると、動物は慣れていないので近づいて来ず、逃げて行く。四彼らが上陸するのを見ると牧人はラッパを吹く、すると家畜はまっしぐらに走って行き、ラッパに集る。そこでこれは野生だという印象を与え、それによりティマイオスは不十分で、片手間の調査に基づいて、このでたらめの説明をしているのである。五動物がラッパに従うことは何も不思議なことではない。イタリアでも豚を飼う場合に同様のやり方をする。六すなわち、豚飼いたちはギリシャ人がそうするように、家畜のすぐ後からついて行くのではなく、角笛を吹きながら距離をとって先を歩き、家畜はその後をついて行く、そして声の方へ集まって行く。七羊ははじめて聞く人が驚き、信じられなく思うほどに自分の羊飼いの角笛の調べに慣れる。八そして働き手が多いことと、飼料が豊富なために、イタリアではとくにエトルリア人とガリア人の間では豚の群れは非常に大きく、一頭の雌豚が千頭の豚を、ときにはそれ以上を育て上げる。九それゆえに彼らは豚を夜を過ごした場所から品種と生育年を見ながら引き出していくのである。十次ぎに同じ場所にそれらが駆り立てられ、一つの集団が形成されたとき、その区別は保たれず、どれを駆りたてようか、どれに餌を与えようか、どれを牛舎に連れ戻そうかということによって交じり合ってしまう。十一このことから、こうなったとき、苦労せずに区別するために、角笛による方法を考え出したのである。十二すなわち、ある豚の群れが角笛に合わせてある方向に向かい、別の群れが異なる方向に向きを変えるとき、自分の角笛の音に合わせて非常にてきぱきと行動するので、どんな手段によってもそれを引き戻したり、コースを阻止したりできないほどなのである。十三それに反してギリシャでは、ドングリを探して森の茂みの中でたがいに落ち合うと、多くの働き手を持つ人、良い機会にめぐまれた人が近くにいる豚を自分の群れにつけ加えて連れていく。十四あるときは

盗賊が待ち伏せしていて、連れ歩いている牧人がいついなくなったのか気づかないうちに追い立ててしまう、ドングリが降り注ぎはじめると、家畜の群れはそれを求めて競い合い、連れて歩く人から遠くに離れてしまうからである。

(4) ここで旧約聖書では「羊」、「羊の群」および「羊飼い」がどのような概念で用いられているかを調べてみよう。

エゼキエル書三四章

主の言葉が私に臨んで言う。人の子よ、イスラエルの羊飼いに予言せよ。予言せよ、そして言え、羊飼いたちに。主の主は次のように言う。おゝ、イスラエルの羊飼いたちよ、羊飼いたちは自分たちを養わないのか。羊飼いたちは羊を養わないのか。三あなた方は乳を飲みそして羊毛を身にまとう。あなた方は肥ったのを屠り、私の羊を養わず、弱っているものを元気づけず、病気のものを強くせず、砕かれたものに包帯をせず、迷ったものを連れ戻さず、いなくなったものを探さず、強きものを苦労を強いて押さえつけた。私の羊は羊飼いがいないために散らされて、そして野のすべての動物の餌食となった。六私の羊はすべての山の中で、すべての高い丘の上で散らされた。そしてすべての地の前面で散らされた。探し出そうとする人も、呼び戻そうとする人もいなかった。七このために、羊飼いたちよ、主の声を聞け。八私は生きている。主の主は言う。私の羊は羊飼いがいないために糧食となる代わりに野のすべての野獣の餌食となった。そして羊飼いたちは私の羊を探さなかった。羊飼いたちは自分を養ったが私の羊は養わなかった。九それゆえ、羊飼いたちよ、十主の主は次のように言う。見よ、私は羊飼いたちに臨み、私の羊を彼らの手から返してもらおう、そして私の羊を飼うことから彼らを追い払おう。そして羊飼いたちはもはやそれを飼わないだろう。彼らの口から私の羊を取り去ろう。そしてそれは彼らの食べ物にはもはやならないだろう。十一それゆえ主は次のように言う。見よ、私は私の羊を探し出そう。そして私はそれを心にかけよう。十二羊飼いが自分の羊の群をばらばらになった羊の真中に暗闇と雲がかかっている日に探すように、そのように私は私の羊を探そう、そして雲と暗闇の日に散らばされたあらゆる場所からそれを遠ざけよう。十三もろもろの民からそれを連れ出し、それをさまざまな地方から集め、それを彼らの地に導き入れ、そしてイスラエルの山で、そして峡谷で、その地のすべての住居で養おう。十四良き牧草地でそれらを養おう。彼らの家畜の囲いはイスラエルの高い山にあるだろう。彼らはそこで寝るだろう、そこで良

き快楽の中で憩うだろう。そしてイスラエルの山で肥沃な牧草地で放牧されるだろう。十五 私は私の羊を養おう。そして彼らを休ませよう。そして私が主であることを知るだろう。主は次のように言う。十六 私は失われたものを探し、迷ったものを連れ戻し、砕かれたものに包帯をまき、取り残されたものを強くし、強きものを見張り、そして裁きでそれを養おう。十七 そしておまえたち、羊よ、主の主は次のように言う。見よ私は羊の間で、雄羊と雄山羊の間で裁こう。十八 おまえたちには良き牧草を食むだけでは充分ではないのだ。おまえたちは食べ残した牧草を足で踏みつけているのだ。澄んだ水を飲みながら、残りを足で濁らしている。十九 私の羊はおまえたちの足で踏みつけられたものを食み、おまえたちの足によって濁らされた水を飲んでいる。二〇 それゆえ主の主は次のように言う。見よ、私は強い羊と弱い羊の間で裁こう。二一 あなた方は脇腹で、肩で押し、角で突き出し、すべてのとり残されたものを押し出そうとした。二二 私は私の羊を救おう。彼らがもはや飼料徴発の対象にならないように。私は雄羊と雄羊の間で裁こう。私は彼らにたいして一人の羊飼いを任命しよう。そして彼が彼らを養うだろう。すなわち、私の僕、ダヴィデを任命しよう。彼が彼らの羊飼いとなるだろう。

エゼキエル書、三七章

二一 そして彼らに次のように言いなさい。主の主は言う。見よ、私は彼らが入って行った諸民族の真中からすべてのイスラエルの家を取る。私は彼らを彼らの周辺のすべての地から集めそしてイスラエルの地に導こう。二二 私は彼らを私の地とイスラエルの山々の中で一つの民にしよう。彼らの一人の支配者があるだろう。彼らは二つの民とはならないだろう。二つの王国に分かれることもないだろう。二三 彼らが彼らの偶像の中でわれを忘れることがないように。私は彼らが犯したあらゆる不法から彼らを救い出し、清めよう。彼らは私の民となり、そして私は彼らの神となろう。二四 そして私のしもべ、ダヴィデが彼らの真中で支配者となり、すべての者の一人の羊飼いとなるだろう。というのも彼らは私の指示で歩み、私の裁きを守り、それをおこなうだろうから。

(5) 主の声を聞き、自発的に、自分の意志で羊飼いの後についてきて、自然に一つの群が形成される、と述べるキリストの言葉と主がさまざまな民に臨み、イスラエルの民を選び出し、戒律を守らせて、あくまでも神の意志で一つの群を形成すると述べる旧約聖書の教え。ここにユダヤ教とキリスト教の違

いがあざやかに浮かび上がっているように思われる。もちろん、それを説明するためには神学上の厳密で精緻な記述が必要なのであろうが、素人の私には立ち入った論述の展開はとてもできないのでそれはしないでおく。

(6) 旧約聖書はエジプトのアレクサンドリアでプトレマイオス王朝時代の前3世紀ころ、その土地に住むユダヤ人の話す言葉が地中海一帯で広く使われていた言葉であるコイネーギリシャ語となったために、一般民衆にはヘブライ語で書かれている聖書が読めなくなり、そのためにヘブライ語で書かれていた旧約聖書がギリシャ語に翻訳された。それがセプトゥアギンタと呼ばれるものである。

そして当時の教養書は当然ながらすべてギリシャ語で書かれたものであり、この省察の中で取りあげたポリュビオスの『世界史』もそうした教養書の一つと考えられる。

旧約聖書のヘブライズムと当時のヘレニズムとが融合して新しくキリスト教が生み出されたと考えられるのであるが、三つの書すなわち『セプトゥアギンタ』、『新約聖書』、『世界史』をこの省察でしたように比較検討してみると、それを具体的な形で把握できるように思われる。

註

*ティマイオス

タオルミナの人、前三四六年から二五〇年。僭主アガトクレスがシケリアを強奪した後（前三一七年）かあるいは彼のカルタゴ遠征（前三一二年）の前にティマイオスは逃亡したに違いなく、アテネで五十年過ごした。ここで彼はイソクラテル・フィリスコスによって修辞学に導かれた。ヒエロンⅡ世の治世のときにシケリアに戻ったように思われる。彼は我々が知るかぎり哲学は学ばなかった。さまざまな逍遥派の哲学者にたいする彼の鋭い批判、とくにアリストテレス、テオフラトス、ヘラクレイデス、カリステネスにたいするそれは哲学一般に対する彼の立場と関係して解釈できるかもしれない。

アテネでの滞在は彼の歴史研究が関係する領域から彼を疎遠にし、その結果彼の家系と社会的地位からすれば現場で良い情報を手に入れる状況にあった彼には、彼自身の告白によると戦争体験は一切なく、ポリュビオスの追記によると地理的検分もまったく欠けており、完全に文献的資料に頼るということになっている。

彼の包括的なシケリア史は最古の時代に始まり、主要部分では僭主アガトクレスの没落（前二八九年）まで及んでいるが、シケリアだけに留まらず、イタリアおよびカルタゴの歴史

も包括し、数多くの脱線でギリシャとの諸関係にも言及し、そのあらゆる郷土愛的な色合いにもかかわらず世界史的特長は否定できない。作品は三八巻から成り、五巻にわたってのアガトクレスの歴史が結末を形成している。

彼の全体としての評価は歴史学を方法論的には促進させなかったが、石碑にまでもおよぶ収集熱心によって多くの材料を集めたということになる。後期の作家はその豊富な材料のために感謝してあるいは恩知らずに彼を利用している。アレクサンドリアのリュコフロン、カリマコス、エラトステネス、アルテミドロス、ポリュビオス、ディデュモス、プセウドスキュムノス、ポセイドニオス、ストラボン、ディオドロス、トゥログス・ポンペイウス、アッティクス、ネポス、オウィディウス、プルタルコス。(Wilhelm von Christ's *Geschichte der Griechischen Literatur* 2,1 S. 218ff.)

資料

Septuaginta, ed. Alfred Rahlfs, Wuerttembergische Bibelanstalt Stuttgart 1962.

Das Neue Testament Griechisch und Deutsch, 1986 Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart.

Polybius Historiae, Bibliotheca Scriptorvm Graecorvm Romanorvm Tevbneriana.

Eine Betrachtung über die Parabel vom Schafhirten des Evangeliums nach Johannes

Toshiyuki Takeshima

Erstens wurden die Abschnitte eins bis achtzehn des zehnten Kapitels Johannes übersetzt und nachgewiesen, dass die Stelle 16 "Und ich habe noch andere Schafe, die sind nicht aus diesem Stall; auch sie muss ich herführen, und sie werden meine Stimme hören, und es wird meine Herde und ein Hirte werden," einen sehr wichtigen Begriff der christlichen Lehre dargestellt hat.

Weiter wurde das dritte und vierte Kapitel des zwölften Buchs von Polybios "Weltgeschichte" übersetzt und behauptet, dass diese Sätze an die obengenannte Stelle des Evangeliums nach Johannes erinnern und man vermuten kann, dass das Buch von Polybios vielleicht einen Einfluss auf die damalige allgemeine Bildung hatte.

Zur Bestätigung dieser Behauptung wurden ferner die Abschnitte eins bis vierundzwanzig des vierunddreißigsten Kapitels des Propheten Hesekiel aus dem Alten Testament und die Abschnitte einundzwanzig und vierundzwanzig des siebenunddreißigsten Kapitels übersetzt und der Unterschied der Behandlungsweise des Begriffs "Schafhirt" zwischen Neuem Testament und Altem Testament dargelegt.

Zum Schluss wird die Behauptung aufgestellt, dass man an dieser Stelle der Darstellung von Polybios in einer konkreten Form feststellen kann, dass der Hebraismus mit dem Hellenismus verschmolzen und daraus das Christentum neu entstanden ist.